

世界史B（2年） 4/13～17の学習内容②

教科書P48、123～127の学習を進めてください。文末の小テストは考査で出題します。

今回は、参考書がなくても教科書の内容を理解できるよう、文章で内容の解説をしてみます。一度読んでみて、理解につながると思う人は利用してみてください。

第1回「フランク王国の発展」

ゲルマン人が西ローマ帝国の領土内に侵入して、西ローマ帝国を滅ぼし、各地にいろいろな王国を作ったことは、きっと勉強していると思います。

他の科目が忙しくてまだ終わっていないという人は、資料集P137^[1]の図を見てみてください。

ゲルマン人の王国はたくさんできましたが、どれも長続きしません。国を建てるのは、権力者のカリスマや、軍隊の力で何とかなってしまうのですが、国を維持するのは、適切な法や徴税など、知性と組織力が必要になるからです。

そのためには、官僚、役人、官吏、どんな言い方でもいいのですが、知識人が必要なのです。

ゲルマン人が、そのような人材をどこから採用するのか？

答えは一つしかありません。

それは、「旧ローマの知識人や貴族」です。ローマは滅んでも、ローマに属していた人たちは生きています。この人たちを国に取り込むことができた数少ない国が、フランク王国でした。

それによってフランク王国は大きく発展し、やがてフランスやドイツ、イタリアといった、今に残る国々の原型になっていくのです。

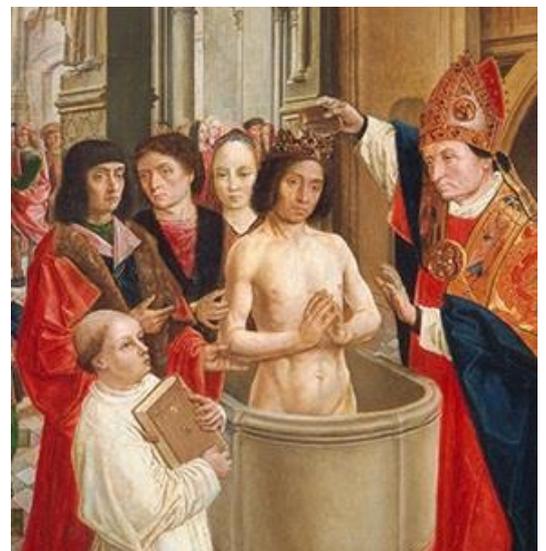
フランク族を統一してフランク王国を建設したのは、メロヴィング家のクローヴィスという人です。この人は、「腹黒・狡猾・好色」という、悪の三冠王とも言うべき国王と伝えられています。彼は部族内の他の有力者を次々と策略でおとし入れ、フランク王国の建設を成し遂げました。彼が建てたこの王朝を、メロヴィング朝と呼びます。

もう一つ、クローヴィスがしたこと大事なのは、彼が、「ローマ人と同じキリスト教アタナシウス派に改宗した」ことです。

当時、ゲルマン人の多くはキリスト教のアリウス派でした。宗派の違いは、次回に詳しく説明します。

右の絵はなんか変な絵ですが、入浴のシーンではありません。クローヴィスがランスという町で、ローマ人の聖職者から洗礼を受けて、カトリックに改宗しているところです。

これによって、フランク王国はローマ人を国内に取り込み、西ヨーロッパの大国に成長していくのです。



こうして大国に成長したフランク王国ですが、年月が流れる中で次第に、王族どうしの対立が深まってきました。

すると、王族同士の間を取り持つ役割の家臣が、次第に影響力を強めていきます。それは「宮宰」（きゅうさい）という役職で、フランク貴族のカロリング家がつとめていました。

不安定だったフランク王国を大きく揺るがしたのは、8世紀に入ってイベリア半島に侵入してきた、ある勢力です。この勢力が何だかわかりますか？1年生の終わりの方で、勉強しているんです。

それは、7世紀に生まれたイスラーム勢力です。ウマイヤ朝の時代に、イスラーム勢力は北アフリカを超えてイベリア半島に侵入し、ゲルマン人の西ゴート王国を滅ぼして、フランク領内にも侵攻してきました。

フランク王国とウマイヤ朝の軍隊が激突するのですが、この戦いの名前を憶えている人もいるかもしれませんね。この戦いは、「トゥール・ポワティエ間の戦い」と言います。

当時、圧倒的な勢いがあったイスラーム勢力を食い止めたのは、メロヴィング家の国王ではなく、カロリング家の宮宰、カール＝マルテルでした。右の絵の人です。

「マルテル」とは「神の金槌」という意味で、大柄で歴戦の勇者であった彼につけられたあだ名でした。彼がこの時フランク王国にいなかったら、歴史は大きく変わり、ヨーロッパは今の形にはならなかったかもしれません。それがいいことか、悪いことなのかは、だれにもわからないけれど。



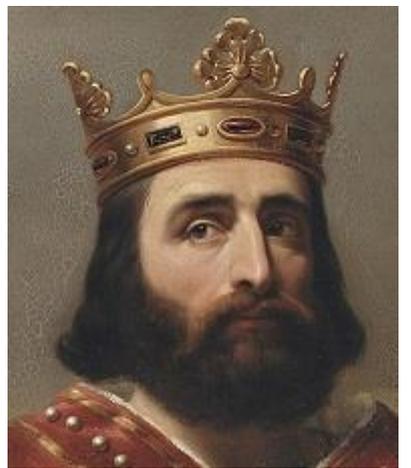
この戦いののち、危機に対応できなかったメロヴィング朝の国王に変わって、カロリング家が実質的な王国の指導者になっていきます。

無能な指導者は危機の時に馬脚を現し、新しい政治への期待が高まるのは、歴史が示す通りです。

この時期のカロリング家は、父から長男へ「ピピン→カール→ピピン→カール」と名前が変わっていくという習慣でした。祖父と孫が同じ名前になるんですね。

そんなわけで、カール＝マルテルの死後は、子のピピンが後を継ぎます。

このピピンは、メロヴィング家の国王をキリスト教の修道院に監禁してしまい、国王の地位を乗っ取ってしまいます。これ以降のフランク王国を、「カロリング朝」と呼びます。



右上の絵がピピンです。長身だった父と違って背が低く、「ピピン短軀王」というあだ名でした。けれど、判断力と行動力とはびきりの人物で、建設後の不安定なカロリング朝を見事に切り盛りしていきます。次回の解説の中で、彼の見事な手腕を見ていきましょう。

